

[illegible]

一のえも住
 留代をいふ
 こと

[illegible][illegible][illegible]

図説日本の古典

第1巻／古事記	武蔵大 学教授	神田秀夫	奈良国立文化 財研究所長	坪井清足	学習院大 学教授	黛 弘道
第2巻／萬葉集	筑波大 学教授	伊藤 博	成城大 学教授	上原 和	学習院大 学教授	黛 弘道
第3巻／日本霊異記	琉球大 学教授	小島環禮	奈良国立 博物館	上原昭一	東京大学 助教授	笹山晴生
第4巻／古今集・新古今集	東京大学 助教授	久保田 淳	美術 史家	白畑よし	聖心女子 大学教授	目崎徳衛
第5巻／竹取物語・伊勢物語	大阪女子 大学教授	片桐洋一	大谷女子 大学教授	伊藤敏子	聖心女子 大学教授	目崎徳衛
第6巻／蜻蛉日記・枕草子	明治大 学教授	木村正中	美術 史家	白畑よし	東京大 学教授	土田直鎮
第7巻／源氏物語	東京大 学教授	秋山 虔	東京大 学教授	秋山光和	東京大 学教授	土田直鎮
第8巻／今昔物語	早稲田大 学教授	国東文麿	美術 史家	梅津次郎	京都女子 大学教授	村井康彦
第9巻／平家物語	神戸大学 名誉教授	永積安明	大阪大 学教授	武田恒夫	京都大 学教授	上横手雅敬
第10巻／方丈記・徒然草	お茶の水女子 大学助教授	三木紀人	東京国立文 化財研究所	宮 次男	東京大学 助教授	益田 宗
第11巻／太平記	早稲田大 学教授	梶原正昭	東京国立文 化財研究所	宮 次男	京都大 学教授	上横手雅敬
第12巻／能・狂言	東京大 学教授	小山弘志	京都国立 博物館	切畑 健	大阪市立 大学教授	原田伴彦
第13巻／御伽草子	国文学研究 資料館長	市古貞次	東京国立 博物館	高崎富士彦	東北大学 名誉教授	豊田 武
第14巻／芭蕉・蕪村	福岡大 学教授	白石悌三	文化 庁	佐々木丞平	学習院大 学長	児玉幸多
第15巻／井原西鶴	埼玉大 学教授	長谷川 強	東京大 学教授	山根有三	学習院大 学長	児玉幸多
第16巻／近松門左衛門	学習院女子短 期大学教授	諏訪春雄	大阪大学 助教授	信多純一	横浜市立 大学教授	辻 達也
第17巻／上田秋成	国文学研究 資料館教授	松田 修	東京国立文 化財研究所	河野元昭	学習院大 学教授	大石慎三郎
第18巻／京伝・一九・春水	早稲田大 学教授	神保五弥	名古屋大 学助教授	小林 忠	立正大 学教授	北原 進
第19巻／曲亭馬琴	明治大 学教授	水野 稔	国立国会 図書館	鈴木重三	東京学芸大 学助教授	竹内 誠
第20巻／歌舞伎十八番	早稲田大 学教授	郡司正勝	名古屋大 学助教授	小林 忠	成城大 学教授	西山松之助

図説日本の古典 14 芭蕉・蕪村

昭和53年9月20日 初版第1刷印刷

昭和53年10月4日 初版第1刷発行

著者代表——白石悌三 ©1978

発行者——堀内末男

発行所——株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話—販売部 東京(03)238-2781

出版部 東京(03)230-6351

振替—15653／郵便番号101

印刷所——大日本印刷株式会社

用紙／カラー 王子製紙株式会社

モノクロ 日本パルプ工業株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

文勇堂製本工業株式会社

製本には十分注意していますが、落丁・乱丁の際は
おとりかえいたします。

0391-167014-3041

Printed in Japan

〈企画委員〉

東京大学教授

秋山 虔

国文学研究資料館長

市古貞次

学習院大学長

児玉幸多

早稲田大学教授

神保五弥

東京大学教授

山根有三

〈第一四巻・編集委員〉

福岡大学教授

白石悌三

文化庁文部技官

佐々木丞平

学習院大学長

児玉幸多

芭蕉・蕪村



集英社

目次

●カラー図版●芭蕉筆「島田のしぐれ」懐紙／「庭興即事」懐紙部分／「旅路」画卷部分／「時雨夕陽」自画賛／「月山頂上」／「出羽三山」短冊／「野坡筆」芭蕉像／「月見の献立」／「衰虫の」自画賛／「木槿」自画賛／「菊」自画賛／「水仙」自画賛／「枯枝からす」笠やどり自画賛／「月溪筆」蕪村画像／「蕪村筆」宜秋」／「十宜図」／「夜色楼台図」／「峨嵋露頂図」／「澗河曲」自画賛／市振の宿へ奥の細道図巻」／「若竹図」画賛／「新花摘」の異版本

芭蕉から蕪村へ 白石悌三	24
--------------	----

芭蕉・人と作品／四季の構図 白石悌三	30
--------------------	----

序章 第一の構図・幻の四季画賛 第二の構図・甲子吟行画卷 第三の構図・あつめ句巻	
第四の構図・おくのほそ道 終章	24

●図版特集●

芭蕉自筆自画『甲子吟行画卷』 岡田利兵衛	41
----------------------	----

漂泊イメージの原像・芭蕉翁絵詞伝 田中道雄	35
-----------------------	----

原本の絵と板本の絵 作者・蝶夢幻阿弥陀仏 本書の基本的な性格 『一遍聖絵』の投影
現代人と『芭蕉翁絵詞伝』

宿場と旅 児玉幸多	97
-----------	----

一里塚と旅籠屋 人馬提供 文化の伝播

蕪村・人と作品／戯遊の詩情 山下一海	112
--------------------	-----

修業と放浪 京から宮津へ 讃岐への旅 夜半亭の時代

蕪村の画業 佐々木丞平

『野ざらし紀行図』部分／『追羽子図』部分／『静舞図』／『田楽茶屋図』部分／『三俳優図』／『山水図』部分／『神仙図』部分／『野馬図』部分／『山水図』部分／『晩秋遊鹿図』／『蘇鉄図』部分／『四季山水図』／『塩釜の宿』奥の細道図巻』部分／『鳶鳥図』

137

芭蕉体験の一側面・英一蝶の場合 狩野博幸

漂泊と流謫 狩野家から破門 風俗画への傾斜 配流 戯画ヲ事トセス

152

芭蕉と千代倉家 森川 昭

芭蕉の第一次来訪まで 芭蕉の第二次来訪以後

164

俳画と文人画 佐々木丞平

池大雅筆『瀟湘八景図』／芭蕉筆『萩の図』／杉山杉風筆『菊』自画賛／横井也有筆『若菜摘』自画賛／松村呉春筆『李白午睡図』／横井金谷筆『六俳仙図』／紀梅亭筆『盆踊り』自画賛／渡辺華山筆『安宅』／祇園南海筆『山水図』／浦上玉堂筆『龍煙惹惹図』／青木木米筆『菊石図』／田能村竹田筆『菊石図』／谷文晁筆『下田図』／立原杏所筆『葡萄図』／蕪村筆『山野行楽図』

173

俳書の変遷 雲英末雄

『連歌懷紙』大子集『俳諧御傘』五條之百句『崑山集』俳仙三十六人『談林十百韻』宗因蚊柱百句『澁団』澁団返答『大阪独吟集』本朝文選『冬の日』猿蓑『誹諧京羽二重』おくのほそ道『氣比の海』秋の日『夜半楽』玉藻集『わかな』五色墨『俳翼』秋存分『誹家大系図』俳諧道中双六『おらが春』句曆『金花七発経』縮柳新冊『暗夜訓蒙図彙』萬壽樂『青蔭集』

185

元禄・天明の文化 西山松之助

大都市文化 社会矛盾に触発された文化

192

芭蕉・蕪村俳書解題 楠元六男

208

芭蕉・蕪村関係年表 楠元六男

212

凡例

1 古典文学の珠玉の名作を立体的に構成した本シリーズでは、その内容をさらに意義づけるため、各図版の解説には、その本文部分の執筆者があたったが、それ以外の場合は、とくに解説の末尾に氏名を付記した。

2 本巻の仮名づかいは、原則として現代仮名づかいによった。原文の引用については、歴史的仮名づかいを原則としたが、必要に応じ原本通りとした部分もある。特殊な美術・歴史用語の引用などについては原本通りとした。

3 発句・連句及び句の前書・前文などで、とくに地の文より掲出したものについては、読者の便をはかるため、ゴシック文字で表示した。

4 参考文献を各部分の章末に一括して注記し、読者の便をはかった。

5 各図版に添記した国宝・重文・史跡のうち、重文は重要文化財、史跡は国指定史跡の略である。なお、個人所蔵者名は一部をのぞいて略させていた。

6 本巻の図版写真および資料の収集にあたっては、その所蔵者・管理者・提供者・撮影者など、関係者各位のご好意とご協力を賜った。

〈第一四巻・執筆者〉

福岡大学教授	白石悌三
聖心女子大学名誉教授	岡田利兵衛
文化庁文部技官	佐々木丞平
九州大学助教授	中野三敏
鹿児島大学教授	田中道雄
学習院大学長	児玉幸多
成城短期大学教授	山下一海
帝塚山大学講師	狩野博幸
東京大学助教授	森川 昭
早稲田大学助教授	雲英末雄
成城大学教授	西山松之助
立教大学助手	楠元六男

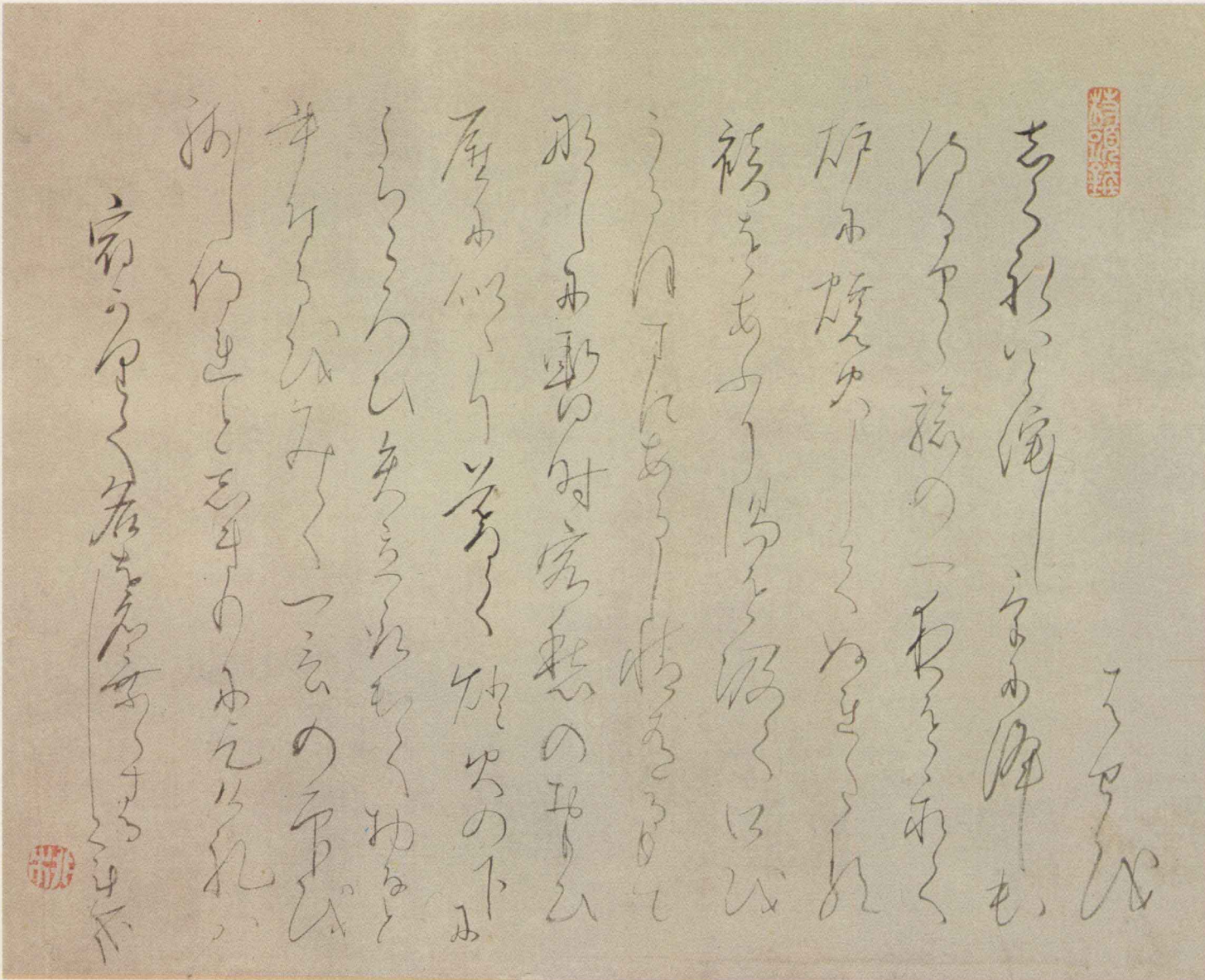
〈装幀〉

後藤市三

レイアウト

宇喜多邦嘉

樋口英男



1 芭蕉筆「島田のしぐれ」懐紙——時雨は、芭蕉の人と作品を象徴する季語である。数ある時雨ものの真蹟の中でも、本懐紙は筆意暢達、寂寥の気のこもる優品である。『続猿蓑』所収発句の詞書には「元禄三年の冬、栗津の草庵より武江におもむくとて、島田の駅、塚本が家にいたりて」とあるが、元禄3年(1690)は4年の誤り。塚本家は大井川の渡しを司る川庄屋で、主人孫兵衛は如舟と号し、東海道往復の芭蕉を再々ひきとめた。本懐紙は同家の伝来品で、関防印「杖頭銭」の押捺は珍しい。縦24.6cm 横30.3cm／東京都・出光美術館

「島田のしぐれ」懐紙・釈文

はせを
しぐれいと詫しけに降出
侍るまゝ旅の一夜を求て
炉に焼火してぬれたる
袂をあふり湯を汲て口を
うるほすにあるし情有るもて
なしに暫時客愁のおもひ
慰に似たり暮て燈火の下に
うちころひ矢立取出て物など
書付るをみて一会の印を
残し侍れとしきりに乞ければ
宿かりて名を名乗らする
しぐれ哉

2 芭蕉筆「庭興即事」懐紙——「庭興即事 作りなす庭をいさむるしぐれかな 東野芭蕉」を「時雨」特集の題字がわりとした。屈託なく伸びた見事な筆蹟である。元禄4年(1691)10月上旬、近江から江戸に帰る途中、美濃垂井の本龍寺で筆を執り、住職の規外に贈ったもの。境内には幕末建立の句碑があるが、蝶夢編『芭蕉翁発句集』によったか、初五が「作り木の」になっている。縦31.0cm 横46.5cm／兵庫県・柿衛文庫



3 芭蕉筆『旅路画卷』部分——琴風所蔵の立圃筆「盲人図」と其角筆「乞食図」に感じた芭蕉が、「三界を笠にいただきて風月をともしなひ吟行せし図を此の後に備へん」と淡墨で描き、濁子に彩色させ、あとから句文を書き込むつもりでそのままになってしまったのを、芭蕉没後に琴風が入手して三画一軸と成した。落款がないため、素堂が証人となって、以上の成立事情を跋に記した。掲出部分は全9図中の第1図、時雨の中を旅立つ人物が描かれている。全体に許六の影響が著しい。蓼太がこれを鑑定した成美苑書簡が備わり、『甲子吟行画卷』に少しも違わぬと購入を奨めている。ちなみに、濁子は『甲子吟行画卷』の清書者である。高さ22.5cm／兵庫県・柿衛文庫

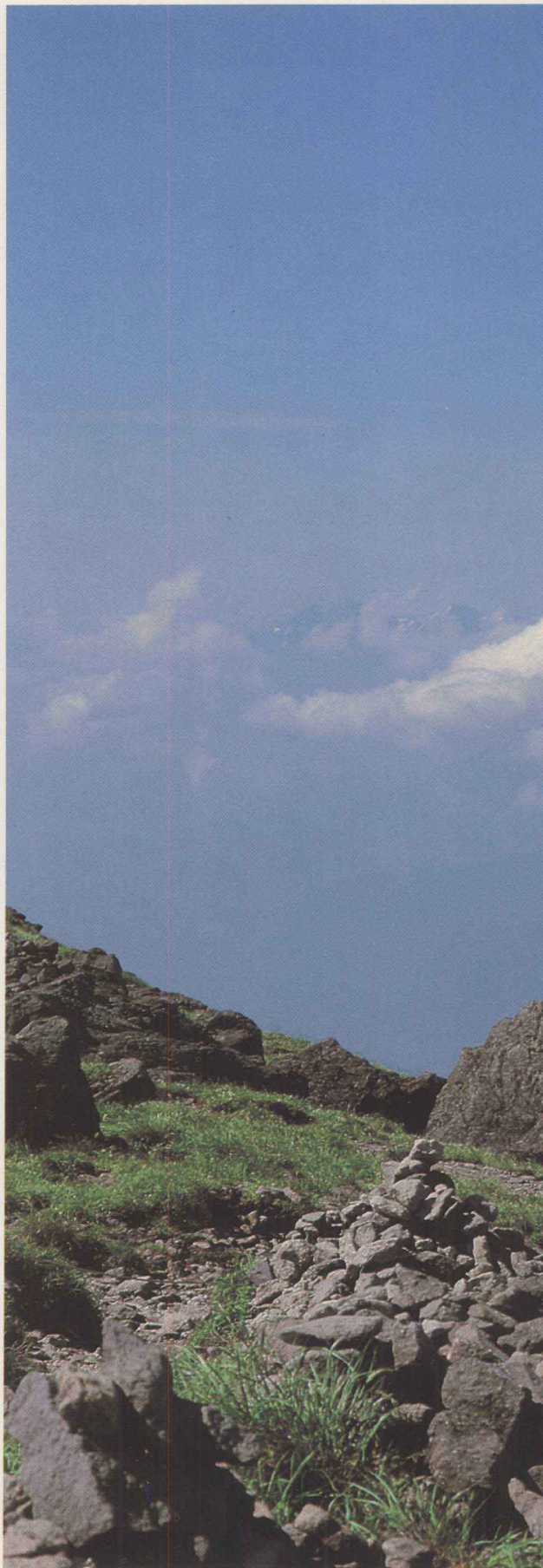
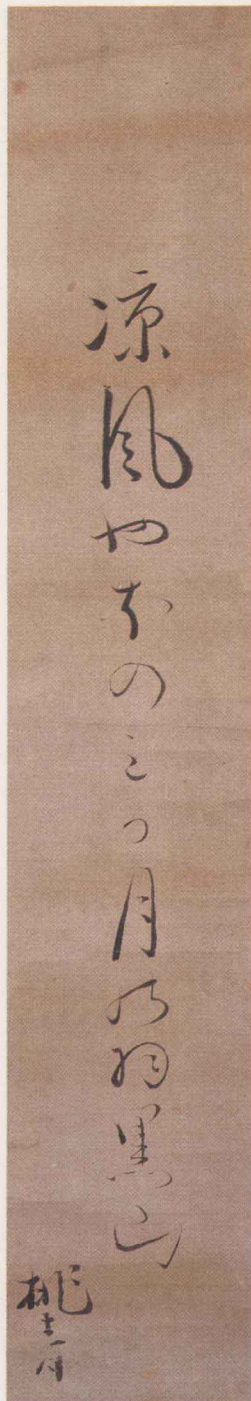
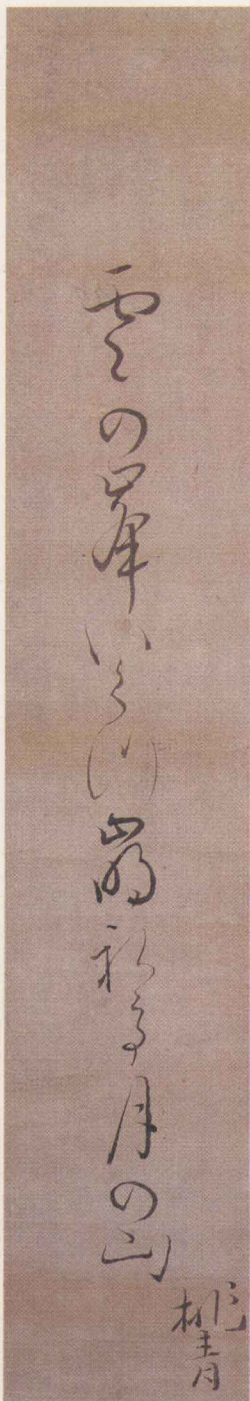
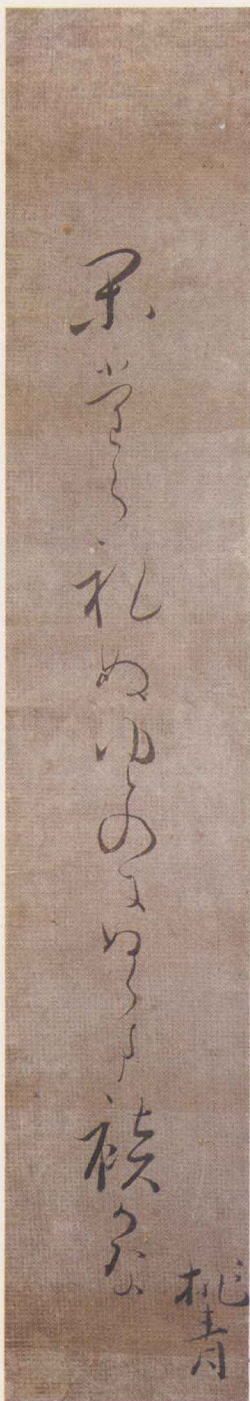




4 芭蕉筆「時雨夕陽」自画賛——95.2×27.4cmの縦幅の上半に、「けふばかり人も年よれ初しぐれ 芭蕉散翁画」の賛を加えている。元禄5年(1692)10月3日夜、彦根藩江戸屋敷内の許六亭で興行した五吟歌仙の発句である。当年36歳の許六に対して、今宵ばかりは老の心になってもの寂びた時雨の情趣を味わい給えという挨拶。別掲の『旅路画卷』中の人物と相似たポーズである。夕日は赤く描くのが習い。画風は狩野派に近いといわれる。／大阪府・正木美術館







6~8 芭蕉筆『出羽三山』短冊——
『おくのほそ道』によれば、下山後、羽黒山
別当代会覚阿闍梨の需めによって三山巡礼の
句々を短冊に書いた。「涼風やほのみか月の
羽黒山」「雲の峯いくつ崩れて月の山」「かた
られぬゆどのにぬらす快かな」の3枚がそれ
で、署名はいずれも「桃青」である。羽黒山
の句は、『おくのほそ道』では「涼しさや」
に改められている。月山頂上には昭和33年
(1958)、「雲の峯」の句碑が建てられた。/
山形美術館

5 月山頂上——出羽三山の最高峰で標高
1980m。芭蕉は元禄2年(1689)6月6日登頂、
月山権現を拝んで角兵衛小屋に泊まった。
『おくのほそ道』には「木締しめ身に引きか
け、宝冠に頭を包み、強力といふものに導か
れて、雲霧山気の中に氷雪を踏んで登ること
八里、更に日月行道の雲間に入るかとあやし
まれ、息絶え身こごえて頂上に到れば、日没
して月顯る。笹を敷き蓆を枕として、臥して
明くるを待つ。日出でて雲消ゆれば湯殿に下
る」とある。高山植物タカネザクラに目をと
めて「降り積む雪の下に埋れて春を忘れぬ遅
桜の花の心わりなし」とも記している。

月見の献立・釈文

八月十五夜

一、芋煮

酒

のつべいせうが

一、煮物

こんやく

ごぼう

木くらげ

里いも

中ちよく

もみふり

かうの物

肴

にんじん

焼初茸

しほり汁

すり山のいも

す

しやうゆ

くわし

かき

吸物

冷めし

とりざかな

松茸

〇献立懸物

是ハ赤坂庵ノワタマシ折節名月

カケテ門人ヲマネキモテナサレ

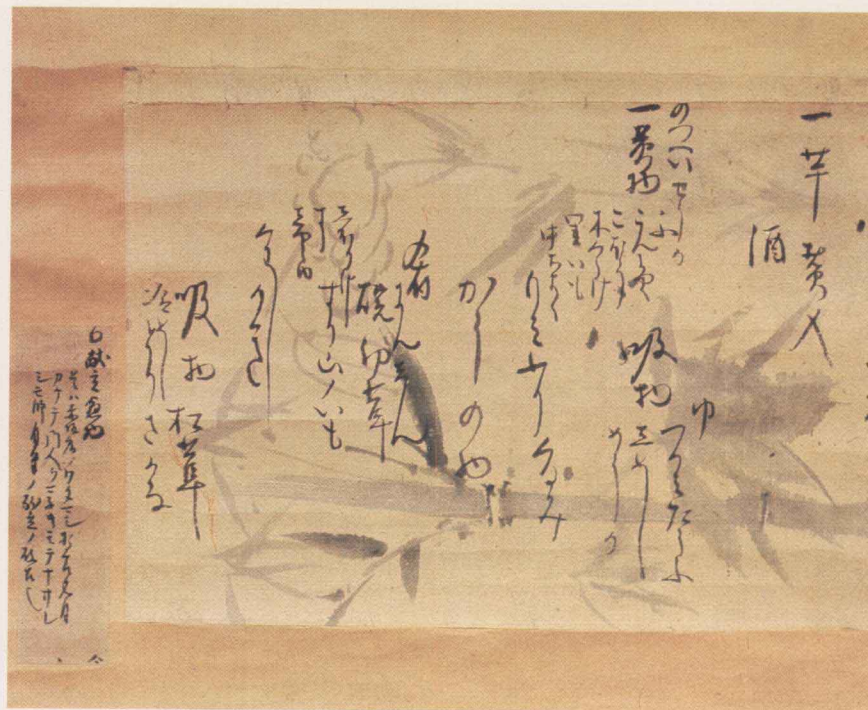
シニ師自筆ノ献立ノ破古也

9 野坡筆『芭蕉像』——野坡が芭蕉に親炙したのは元禄6,7年であるから,最晩年の面影である。「月はなやたびの翁の筆はじめ 野坡書」の賛がある。筑前の博多織の老舗松居家に伝来したもので,野坡は相似た図柄の芭蕉像を他にも筑豊地区に残している。野坡・許六・杉風ら直門の手に成る芭蕉像には,さすがに共通した面影があつて,破笠などの描いた玄人画よりも,かえって好ましい。縦42.7cm 横31.6cm/東京都・杉浦美知子





11 芭蕉筆「養虫の」自画賛——「草の戸ばそこに住みわびて秋風の悲しげなる夕暮」の図である。つまり芭蕉自画の芭蕉庵であるが、66図の許六筆「祖翁像並芭蕉庵柴門図」の柴門と全く同じで、それを内側から見た構図になっている。許六との交渉が生じた晩年の染筆であろう。当時の染筆である芭蕉賛一蝶画は162ページに掲出した。いずれも杉風旧蔵の鯉屋伝来品である。土方に贈ったという自画賛は伝存しないが、これによって土方は自庵を養虫庵と名付けた。縦93.3cm 横29.7cm／東京都・出光美術館

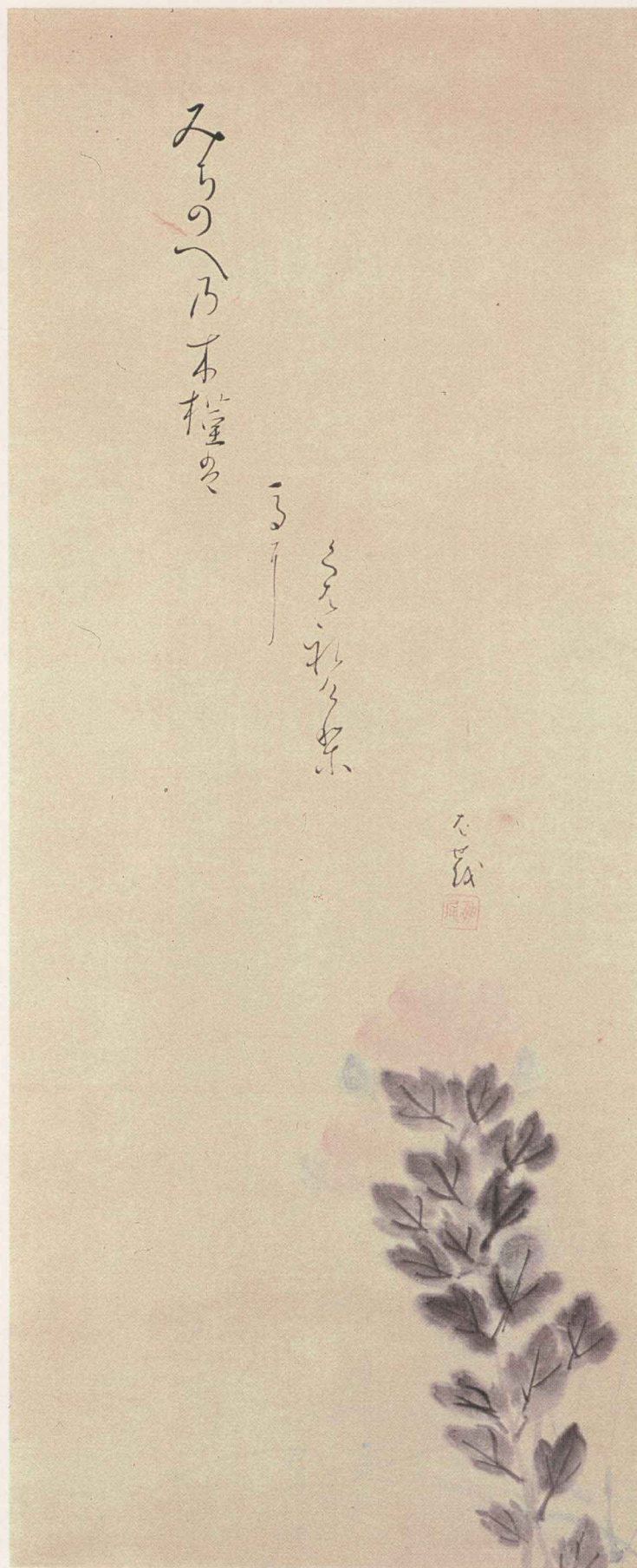


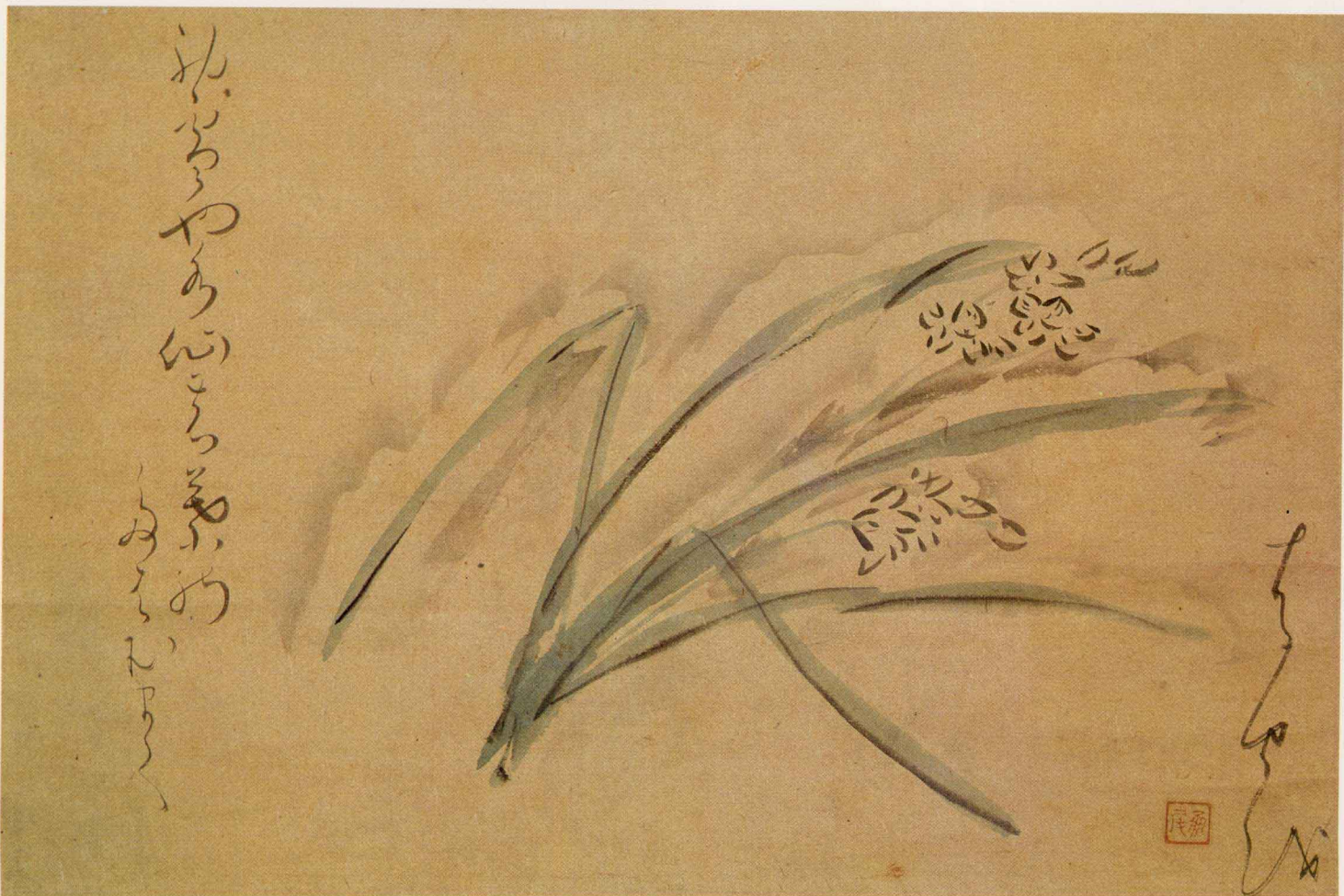
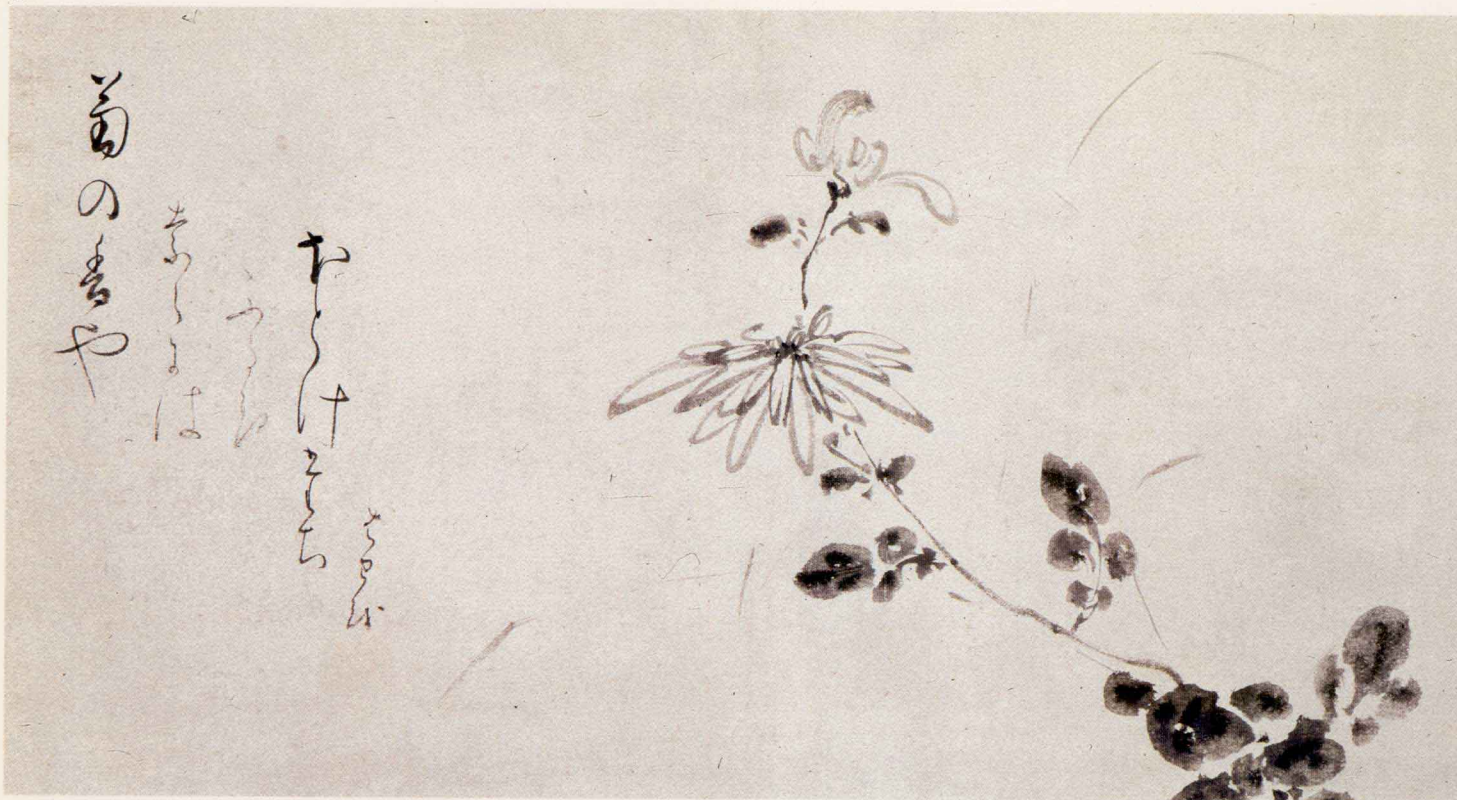
10 芭蕉筆「月見の献立」——芭蕉生の裏庭に「無名庵」と記した棒杭が立っている。元禄7年（1694）、芭蕉が最後に帰した時、兄や門人有志によって釣月軒の西に建てられた。8月15日、芭蕉はこの新で、落成式をかねて観月会を催した。そのの献立表である。料紙は、芭蕉が少年の頃習いに竹と花を描いた反古を利用したもの。いい、精進料理ながらもなかなかの御馳走である。生涯で、これが最後の月見の宴になった。縦24.0cm 横32.8cm

13 芭蕉筆「菊」自画賛——左端から右に「菊の香やならにはふるきほとけたち はせを」と賛を加えている。元禄7年（1694）9月9日、重陽の節句を古都奈良に迎えての詠句。最晩年の作であり、終焉の地大阪での染筆であろう。旅中即事の一筆とみえて、印記がない。絵は楚々たる一本菊にかぼそい薄を配した水墨画で、得意の画題である。書画渾然として、晩秋の香気におうがごとき雅趣がある。縦26.6cm 横44.8cm／東京都・出光美術館

14 芭蕉筆「水仙」自画賛——芭蕉俳画中の傑作といわれる。画面中央いっばいに雪にたわむ水仙が奔放に描かれて、左端に「初雪や水仙の葉のたはむまで」の賛句、右下に「はせを」の署名がある。句は『あつめ句』中のものであるが、書体は晩年のもので、当時の染筆ではない。水仙を対象にして、句も画期的な詩情の発見といえるが、絵もそれにふさわしい清冽の趣がある。木草の花は芭蕉好みの画題で、他にも萩や山吹の逸品があるが、掲出した三画三様の風趣を比較されたい。縦30.2cm 横45.1cm

12 芭蕉筆「木槿」自画賛——109.4×25.5cmの豎幅の上半に「みちのへの木槿は馬にくはれけり はせを」の賛を加えている。左から右に3行書きにしているが、「菊」の自画賛も同様で、珍しくない。寓意をもって解されることが多い句だが、『甲子吟行』初稿に「眼前」、成稿に「馬上吟」の詞書があり、吟行中の秀逸とも称された。貞享末期の染筆か。絵にも優雅の趣がある。／東京都・出光美術館





枯枝からす 笠やどり

芭蕉筆

秋の暮る



15 芭蕉筆「枯枝からす 笠やどり」自画賛

縦三・五寸、横八・五寸の大絹本。着色で前半に「枯枝にからすのとまりたるや秋の暮」の句と画をかき、後半に「笠やどり」と題し、文と「世にふるは更に宗祇のやとり哉」の句と、一人の人物を中心とした山水をえがいた一幅である。落款は左端に「泊船堂芭蕉翁」と署し、二印を押している。

画は枯れた大樹の上半を墨で（極一部褐色）えがき、それに真紅に紅葉した蔦がまわっている。鳥は枝に止まった七羽と、着枝直前で梢上の空に舞う二十羽、計二十七羽がえがかれる。

この句は延宝九年（一六八二）六月成る、言水編の『東日記』に初見するものであるが、のち元禄二年（一六八九）の『阿羅野』には、穏やかに改案されて「かれ架に鳥のとまりけり秋の暮」となっている。以下改案形であるが、これから受ける感じは、枯れた枝に一羽の鳥がとまっている秋の夕暮のうら侘しい感触である。そう考えられて来た。だのに本自画賛では鳥が二十七羽と群をなし、樹も冬枯れの太木であるから、発想当初は眼前風致の写生だったと思わねばならぬ。これは中国趣味の寒鴉枯木から、和風の枯淡閑寂へ移動したものであろう。

一方「笠やどり」の画は長文のつぎにあつて、背景に水墨の山二つ、そのまた奥に白い雪の山一つ、そして手前の土坡に二本の松の巨木、これは幹は代赭で赤松を示し、松葉を濃緑色でえがく。その自然の中に、円頂緋衣の僧形人物が素足で、笠を手に持って時雨模様の空をながめている。宗祇らしい人間をえがいており、「世にふるは」の句とよく照応する。

文は古来の笠にゆかりの風流故事をつらね、うらぶれの風情を巧みに表現している。文中で注目すべきは「妹があたりのしのび笠」の条である。これはさびの中に一抹の愛を示したものの。連句構成でいえば恋に当たるものであろう。恋のない連句は連句でないといまでいわれるが、恋の付句に抜群の手腕を発揮する芭蕉のうまさもここでもよく感受される。

芭蕉の筆蹟は彼の風雅と並行して、八段階の上昇を上げた。本点の書風は延宝と天和、つまり第二段と第三段の境目に位置する。この期における芭蕉の書癖が本点に多く出ているのである。「枯（偏が左へ傾く）・寸・濃・多・乃・札・花・世」など、特に顕著なのは「し」の長いこと、「や」の杖の短いなど。それと落款に「泊船堂」とあることなどから本点の揮毫は天和元年秋冬と推定される。芭蕉が深川の泊船堂へ移ったのは延宝八年（一六八〇）冬で、それから天和二年（一六八二）十二月の庵の類焼時まで住んでいた。

画については紙面の都合で四一ページの『甲子吟行画巻』で併せて述べるが、突如としてこんな雄大な画作が



出現したのに驚いた昭和四十七年四国で発見された。はやく、すでに天和元年にかかる大作揮毫があったのである。

「笠やとり」の文は、「笠はり」の記となって多く伝わる。まずこれについて昭和四十九年に「笠はり」の真蹟懷紙が紹介された。その他「笠はり」「雪満呂気」「洪笠ノ銘并序」「和漢文操」・「笠はり」「思亭」・「かさの記」巻子(小泉三申氏蔵)など以下後代にまでつづくこれらの展開についての論文が多い。しかし揮毫年次から考えても、内容から見ても、この自画賛が最も先行するものと思われる。この文が「世にふるは」の句の前書として記され、まだ「笠はり」には触れていない点を見逃してはならぬ。

この句は天和三年刊其角編の『虚栗』に発表され、それには手つから雨の佗笠をはりての前書が付いている。恐らく天和二年冬の発想であろうからこの自画賛につづくものであり、この頃(芭蕉三十八、九歳頃)の芭蕉の心の志向がわかる。

こうして笠にかかわる芭蕉の記述は、よほど文雅人につよくアピールしたものである。以上述べたように、本点は多くの示唆を持つ貴重な資料といわねばならぬ。

(岡田利兵衛)

芭蕉筆「枯枝からす笠やとり」自画賛・釈文

枯枝にからすのとまりたるや秋の暮

笠やとり

坡翁雲天の笠の下には

江海の蓑を振舞ふのちまたに

雨やとりし給ふめる西行の佗笠

哀に遣シ鶯のぬふてふ梅の

花笠は老をかくして妹か

あたりのしのひ笠行過兼て

笠やとりひち笠の雨に打そほつ

寛みかさと申せ蓮の葉の笠

いさきよし此笠は是艶ならず

美ならずひとへに山田守捨し案山子の

風に破られ雨にいためるかとし笠の

あるしも又風雨を待て情尽る而已

世にふるは

更に宗祇の

やとり説

泊船堂芭蕉翁印